あとがき

増　井　三　夫

戦後教員養成史において教科教育を教員養成独自の「学」へ構築する努力が厳しい自己内省と「学」論争をともなっていたことは関連研究成果をひもとけば自ずから明らかである。一方，教科専門に関しては，いわゆる「アカデミズム」論が擁護されたことにより，専門諸科学＝教科専門という牢固として抜き難い認識が堅持されてきた。

本事業は，これまでの成果と課題をふまえ，この難題に挑戦し，教科専門と教科教育を架橋する教育研究領域である「教科内容学」構成案を提案している。教科専門を，学習指導要領に準拠して内容構成する授業科目ではなく，教科の内容を専門的に研究・教育する新たな学問領域である「教科内容学」として具体的に提案している。

「架橋」する新たな「学」は，すぐれた教科専門と教科教育の研究者による共通の議論と試行の場で創造されていった。51名によるこの合意形成が新たな「知」の展開の可能性を拓くことを本事業は図らずも実証した。今後，この研究報告書が多数の教育・研究の場で論議されるさいの共通素材となり，各論議との対話によりさらに進化した「教科内容学」がそれぞれの議論の場で構想・実施されるサイクルが教員養成系大学・学部間で共有されることを我々は期待したい。

この事業を実施するにあたり多くの人たちのから貴重なご支援をいただくことができた。私は，なによりも前に，鳴門教育大学学長である田中雄三先生に御礼を申し上げたい。私は，鳴門教育大学の平成21年度～22年度文部科学省先導的大学改革推進委託事業「教員養成に関するモデルカリキュラムの作成に関する調査研究」の研究会とシンポジウムの議論の場に参加する機会を得ることができた。大学の枠と専門領域を越えた対話と論議への参加が，現在の事業を実施するための貴重な勉強の場となった。

弘前大学教育学部長の昆正博先生と岡山大学教育学部長の加賀勝先生には，訪問調査のおりに，ミニ研究会を設定していただき，長時間に渡る議論から，教科専門の在り方について貴重な意見と情報を得ることができた。また，島根大学教育学部長の伊藤豊彦先生からは，高岡信也氏と長時間にわたる情報交換の場を設定していただき，高岡氏の改革に寄せる情熱に私も突き動かされた。広島大学大学院教育学研究科の今岡光範先生と竹村信治先生へのインタビューは，我々の議論の方向性を検証する機会となった。

本事業は，その調査研究の過程で文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室と何度も意見交換を行いながら進められた。企画室の渡邉倫子室長，粟井明彦室長補佐，須原愛記教職大学院企画係長，そして竹村浩伸教育大学係長との論議は緊張感のともなう，あいまいさを浮かび上がらせ，課題を明確にする場となった。さらに，国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部総括研究官の淵上孝氏との意見交流は，本事業をまとめていくにあたり，我々の議論の意義を検討するうえで貴重な機会となった。

最後に，文部省高等教育局専門教育課教育大学室長であった石井稔氏（現慶応大学薬学部事務長）に謝意を表したい。氏より，本事業の開始前から，我々の基本的な考え方についてご理解を得たことが，この調査研究を進めるうえで大きな理論的かつ精神的な支えとなった。石井氏のご配慮に心より御礼申し上げたい。